

住民，行政，学生の全てがウィンウィンとなる 地域創成プロジェクト「ミニ移動大学」 A Regional Revitalization Project “mini Nomadic University” which Fosters Win-Win Relations among Residents, Governments, and Students

國藤 進
Susumu Kunifuji

北陸先端科学技術大学院大学
Japan Advanced Institute of Science and Technology
kuni@jaist.ac.jp

Abstract

This lecture introduces the mini Nomadic University, a four-day workshop with field-work for regional revitalization project. The project fosters win-win relations among students, residents, and government. The outputs of the project are NPO start-ups, community events, and byproduct creations such as JAIST goods. The participation in the project became a trigger for mind innovation.

Keywords — The Nomadic University, The W-shaped Problem Solving, Field Work, Regional Revitalization, Mind Innovation, Field Science

1. 住民，行政，学生のウィンウィン関係を目指して

ミニ移動大学 [7,8,9] は住民，行政のファシリテーション役を大学の学生・教員が担ってウィンウィン関係を構築する地域創成プロジェクトである。北陸先端科学技術大学院大学における 10 年間の試行を経て洗練され，基本的に学生は三泊四日のグループ・フィールドワークを行い，高齢化社会で様々な課題を抱える各町の地域創生のアイデアを提示していく。その結果，住民，行政，と学生という異質の集団のワークショップから，三者間の相互理解が深まり，多くの地方の町で街おこし企画や地産地消の NPO [9] が動き出した。驚くべきことに参加した学生から，多くのコミュニティが生まれ，企業としての成功例 [9] も続出した。すなわち学生のマインド・ノベーションが促進された。副産物としてビジネスモデルを考えた大学グッズの商品化 [9] も促進された。本小論では，野外科学 [1] の立場での地方創成を成功に方法論を詳しく紹介し，ビフォーアフターを含む成功までの方法を分かり易く紹介する。

2. 移動大学と W 型問題解決学

移動大学 [2,3] は文化人類学者川喜田二郎 (KJ) によ

って，W 型問題解決学という方法論 [1] と発想法 KJ 法を武器に，「日本列島を教科書に」学んでいこうという壮大な構想の一環として生まれた。著者はその第一回「黒姫移動大学」の参加者である。「黒姫移動大学」には岡部聡，林義樹，岩政隆一，野村俊夫，小橋康章ら多くの人材が日本中から参画した。また移動大学の教科書にすべく，著者は黒姫移動大学 B ユニット・リーダー牧島信一氏と組み，「問題解決学 KJ 法ワークショップ」 [1] を執筆した。この本は 23 版まで出版され，当時ベストセラーとなった。

さて移動大学のモットーは「一，創造性開発と人間性開放；二，相互研鑽；三，研究即教育・教育即研究；四，頭から手までの全人教育；五，異質の交流；六，生涯教育・生涯研究，七，地平線を開拓する；八，雲と水と」である。移動大学は 20 世紀中に二週間の本格版 18 回，縮小版 4 回の計 22 回行われたが，1999 年を最後に開催されていない。

もう一つの要点は W 型問題解決学の進展である。人間の創造的問題解決は個人であれグループであれ，共通のプロセス・モデルが存在するというのが KJ の主張である。筆者らは多くの移動大学の参加者・主催者の経験から，W 型問題解決のプロセス・モデルを次のように微修正 [6] した。①課題提起ラウンド R1，②現状把握ラウンド R2，③本質追求ラウンド R3，④ネガ・ポジ変換本質追求ラウンド R3.5，⑤構想計画ラウンド R4，⑥具体策ラウンド R5，⑦手順の計画ラウンド R6，⑧実施ラウンド R7，⑨本質検証ラウンド R8，⑩振り返りラウンド R9 である。特に地域や組織の絡む問題では，R3.5 ラウンドの導入が必要であり，どのようなネガティブな本質もポジティブに表現し直し，元気の出るポジティブな課題解決提案をしていくことが必要である。

3. 「ミニ移動大学」教育のねらい

北陸先端科学技術大学院大学(JAIST: Japan Advanced Institute of Science and Technology)では、移動大学経験者の手弁当の応援を経て、2008年以降、毎年夏休みに1回、ミニ移動大学[8]を開催しており、既に総計10回行った。最近の7回は主として夏休み四日間で行っている。学生の役割は住民と行政をつなぐファシリテータに徹することで、住民が動くための起爆剤となることである。

最初に行政側とのフォーマルな打ち合わせで協力を取り付けることから開始する。地方のある地域の課題の概略を掴むことから始める。関連する資料として町内会史、町内会議事録、人口動態、空き家マップ、特産品等の情報を入手する。ついで住民側の町内会役員会に出席し、住民側視点からの課題提起をしていただく。その際、学生・教員側のやれることを鑑み、課題を絞り込む。

行政および教員側から町内会にフィールドワークの協力依頼の回覧を徹底する。重点調査先は前もってアポイントメントを取り、質問用のインタビューメモをとっておく。

四日間の基本スケジュール[7,9]は以下のとおりであるが、フィールドワークの前日にフィールドワークの目的、フィールドワーク注意事項、旅行保険適用範囲、レンタカー使用法、熊よけ鈴使用法の丁寧な説明が必要である。

初日(R1):それぞれの町の課題を明確化するための予備的フィールドワークの日である。午前中、町内会有志の案内で、それぞれの町内を歩き、ふと気にかかることをメモし、写真をとる。午後に課題提起図解を作る。夕食後、ワークショップI[7]を行う。町内会有志の前でその図解を外の目からみた内容として発表する。住民と学生は徹底的な議論を行うことで、アクティブ・ラーニングのセンスが双方ともに養われる。最後に町内会有志は、住民の視点で何が最重要の課題であるかを評価する。

二日目(R2):午前中から午後にかけて、院生は本格的なフィールドワークを行う。初日ワークショップの住民の評価に基づき、現状把握のための写真を撮りまくり、インタビューを行う。スマホ等で撮った全ての写真は小型サイズで印刷する。この写真を用い、写真KJ法を行う。写真をもとにKJ法の要領でまとめたのが現状把握図解である。

三日目(R3.5):現状把握図解を見ながら、参加院生

が集中的に地域活性化案を提案する。地域活性化案はアイデアイラスト図[7]として一人3-5案提案する。この日は朝から晩まで、3.5ラウンドのKJ法に集中する。

四日目(R3.5&R4):午前中に3.5ラウンドのアイデアイラスト図解を完成する。午後は学生と住民とのワークショップII[7]である。このワークショップでは真剣な議論が行われ、課題解決の提案が吟味される。まさに双方ともに真剣に議論する。最終的には、地域再生のための簡易ロードマップを住民に作成していただく。評価と発表はあくまで住民側である。

およそ1-2週間で学生は報告書を作成する。報告書はおおよそ一ヶ月後、町内会にフィードバックされる。通常、町内会の集会場に掲示され、ロードマップに従い、実行可能なものから実行される。以上がフォロー図式である。

大学院大学にふさわしい座標軸的教養として、どのような領域の問題にも適用できる創造的問題解決の方法論を、学生はミニ移動大学[8]で学ぶ。その効果も大きく、例えば課題発見力、アイデア生成力、チームワーク力、プレゼンテーション力、ディベート力などのアクティブ・ラーニングで必要とされるスキルを獲得することができる。

4. 「ミニ移動大学」運動の三種の教育効果

4. 1 院生意識改革

参加した院生がCommInnovationやEurekaという学内コミュニティ[9]を創設した。2009年創設の前者は先輩が新入生を歓迎する「さくら祭り」(四月入学生)や「もみじ祭り」(十月入学生)となり、全学行事となった。後者は留学生の異文化交流サークルとなった。

「ハタブネ・コンサルティング」という院生4人からなる猪のジビエ料理の会社[9]が立ち上がり、羽咋市の支援で猪の解体工場を作った。その代表の吉村祐樹は金沢中心部の寺町に、猪の皮を使った財布やバッグ、および猪の爪を利用したキーホルダーの店を2016年9月に開店した。地元のしいのき迎賓館の「ジャルダンポール・ポキューズ」では、能登シシなどの能登の食材を使ったフルコースのフランス料理を提供している。



図1 能登しし



図2 イノシシ・レザーの加工品

4. 2 住民意識改革

能美市泉台町ではNPO「えんがわ」（中川八郎代表）が立ち上がり、地産地消のスーパーを展開している。志賀町西浦地区の住民はNPOを作り、「秋の収穫祭」を行った。

能美市の粟生町や大成町といった問題意識の高い町内会役員のいる町では、最後のワークショップⅡで決めた実行計画表に基づき、いくつかの活性化プランを実行した。これはこの計画の評価主体が住民だったからである。

町内会とJAISTの協働作業も動いた。例えば辰口図書館「合格図書館」へのJAIST院生の学習支援協力が継続しているほか、灯台笹・岩本町の「竹の子祭り」への応援、両町のJAIST向け「収穫祭」が開催された。

4. 3 副産物の創造

2015年度は宮竹町宮本酒造と協力し、宮本酒造の純米吟醸「夢醸」をベースに、JAIST初の公認グッズである純米吟醸「先端」[9]を院生の原田 祥がラベル製作した。ラベルのネーミング、商標登録、デザイン、PR戦略等で工夫し、JAISTのもつ「デザインの力」でどれだけ売り上げが伸びるかを模索している。「先端」は「地酒で乾杯！」の風土に合い、フルーティでおいしいと各種イベントでふるまわれ、好評・販売中である。

2016年度は寺井町の和菓子屋「日本堂」高田敦司社長の協力で、世界初の「もちもちカステラ」[9]を創作してもらった。このカステラは「日持ちすること、地元の特産品であるユズを使うこと、西洋の知と東洋の知の融合、ハラル対応、世界初の創作和菓子」という我々の提案するコンセプトのもと、高田社長の熱意で製造された世界初の「もちもち感、しっとり感」のある創作カステラである。多くの女性陣の三回の試食に伴う、評

価のフィードバックを経て改善・完成した。「ミニ移動大学 2016」終了後、院生の岡田侑里のラベル提案を参考に、プロのデザイナーが商品のパッケージを完成した。このカステラのパッケージにはJAISweetTs というロゴが記載されている。

2017年度は地元の要望を受け、筆者の住んでいる鶴来地区でミニ移動大学を開催することにした。その結果、白山市とJAISTで包括連携協定を2017年7月4日に結んだ。鶴来地区大国町の和菓子店「ひろの」の協力で、地元の特産品「こうじ」を使ったJAISweetTs 第二号を探索中である。JAIST院生がこの創作和菓子の包装や箱のデザインをする予定である。

5. フィールドワークがウインウイン関係を創出する

アメリカのイノベーションファームIDEOからスタンフォード大学に流れたデザイン思考[5]は、実は日本の自動車産業の方法論であるW型問題解決学を学んで方法論化[6]したものである。我が国の大学・大学院教育のベクトルがシフトしつつある。一つは知識のみならずスキルも教えるアクティブ・ラーニングの導入である。「ミニ移動大学」は最初の7年間は筆者の「副テーマ」として行った。この3年間は希望者も多くなり、JAISTの夏休み「集中講義」として行った。

フィールドワークを伴う2週間の「移動大学」教育を、3泊4日の集中講義「ミニ移動大学」教育で、住民、行政、学生の全てがウインウインのもたらす地域創成プロジェクトの方法論を模索してきた。その結果、ビフォー一段階での行政、住民への十分な根回しとアフター一段階での住民、行政への手厚いフォローアップがあれば、確実に行政、住民および学生の意識改革を起こせることを実証してきた。4日間のフィールドワーク実践



図3 純米吟醸「先端」



図4 三種の創作和菓子

時に、経験豊かな「移動大学」,「ミニ移動大学」のOB,OGからなる応援団と複数名のTAからなるチームのアドバイスが学生の「野生の精神」を復活させることも分かった。

社会人になった際に配属先のフィールドで遭遇する問題は、特定の専門分野の知識とスキルのみで解決できる問題は極めて少ない。問題の派生しているフィールドをじっくり観察し、そこから関連地域・組織を活性化するアイデアをスケッチで提案するやりかたが有効である。W型問題解決学の本質を四日間で経験させる「ミニ移動大学」参加は社会人になった際に役立つベラルアーツを体感できる最高の教育機会である。

要約すると、ミニ移動大学参画で学生のみならず住民の意識改革が促進された。学生がフィールドに行き、観察する中で本当の課題解決の経験を積むことが重要である。深い知識とたくましいスキルを獲得することが、社会人になっても有用な究極のアクティブ・ラーニング教育である。

参考文献

- [1] 川喜田二郎・牧島信一著, (1970) 問題解決学 KJ法ワークブック, 講談社.
- [2] 川喜田二郎編著 (1971) 雲と水と 移動大学奮戦記, 講談社.
- [3] 川喜田二郎編著 (1971) 移動大学, 鹿島研究所出版会.
- [4] ハワード・ガードナー (2001) MI: 個性を生かす多重知能の理論, 新曜社.

- [5] トム・ケリー (2002) 発想する会社, 早川書房.
- [6] 國藤 進 (2015) 創造思考とデザイン思考の統合としてのアクティブ・ラーニング, “情報教育セミナー2015”, ニッショーホール.
- [7] 山浦晴男 (2015) 地域再生入門—寄りあいワークショップの力, ちくま新書.
- [8] 川喜田二郎記念編集委員会編 (2016) 融然の探検, 清水弘文堂書房, Kindle(Amazon).
- [9] 國藤 進, 山浦晴男, 三村 修, 白肌邦生, 由井蘭隆也 (2016) ミニ移動大学 三つの効能, 日本創造学会第38回研究大会論文集, pp.22-25.